

吉永小百合「母と暮せば」

写真上は中日新聞 8 月 26 日朝刊、吉永小百合「私の十本」から。その下の写真は、2016 年 1 月 1 日にレポートした山田洋次・井上麻矢『小説 母と暮せば』集英社、2015 年 12 月の表紙。8 月のさいごに吉永さん「私の十本」から、感涙の映画を振り返りたい。

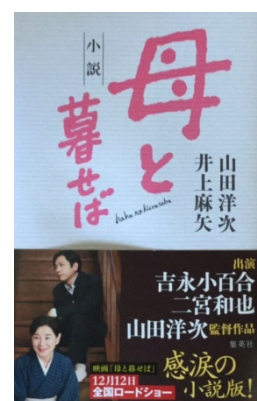


山田洋次監督「母と暮せば」(2015 年)は、吉永小百合さんにとって、119 本目の出演映画だった。

1948 年 8 月 9 日、原爆投下から 3 年後の長崎。吉永さんが演じる助産師、伸子の前に、被爆死した息子、浩二(二宮和也さん)が現れる。

広島原爆をテーマにした故井上ひさしさんの戯曲「父と暮せば」と対をなす作品で、井上さんが生前タイトルだけ決めていた企画を山田監督が映画化した。

「監督にお会いして、終戦 70 年の年に、井上さんの思いを受け継いで、映画にしたいというお話を伺い、その場で出演を決めました」



だが、脚本を手にした瞬間、大変な仕事になることを実感しました。

「初稿を受け取った時、せりふがあまりにも多いのに、びっくりしたんです。そして第二稿では、さらに増えた。私が出た 119 本の中で、一番せりふが多い作品だったと思います。でも、山田監督は撮影が終わった後、もっとセリフを加えればよかったとおっしゃっていましたね(笑)」

大変なのは、セリフの多さだけではなかった。

「はっきり言えば、これは一人芝居なんですね。息子は出てくるけど、彼は本当は亡霊なので、私の心の中に出てきているだけなんです。だから、二人のシーンというのは、『自分の中にある息子』と『自分』とが話しているわけです。こういうかたちのものは全く初めてだったので、とても難しかった。119 本目で一番難しい役にぶつかったと思いました」せりふの中にも、「自分の思い」と「実際にあった過去のことを話す部分」があり、そこに「さらに、息子が入り込んできた世界」が加わる。そうした重層的な世界を作っていくことの難しさを「毎日、感じ続けた現場」だったという。

そんな中で、とても大切なせりふがあった。

浩二のかつての恋人、町子(黒木華さん)から、別な人と一緒になるという報告を受け

た伸子は、町子が去った後、亡霊の浩二に「でも、どうしてあの娘だけが、幸せになるの。おまえと代わってくれたらよかったのに」と、激しく叫ぶ。そして、浩二に諭されて「私は間違ってる。母さんは悪い人、本当に悪い人よ」と悔いる場面だ。

「初稿にはなくて、第二稿で付け加えられたせりふです。現場のスタッフの中にも、このせりふは無いほうが良いという意見もあったようですが、私はすごく人間ぽくってあったほうが良い、と思いました。母親にとっても、役を演じる俳優にとっても、この言葉は、体の芯から絞り出して言う言葉なんです」

吉永さんは実際に母親になったことはない。「どこかで完璧な母親になりたいと思っていたから、自信がなかった」と、自ら選んだ道だった。

「監督がお母さまの思い出を話してくださったことがあります。息子にとって母親は、特別な存在なんですね。そんなことも考えながら、自分なりの母親像を探って演じたつもりですが、どこまで監督の期待に応えられたでしょうか」

謙虚な言葉だが、映画の中の二宮さんとの母子コンビは、とても自然で感じがいい。

「本当に息子がよくてね(笑)。二宮さんがとてもうまく、なついてくださった。『なついて』なんて言うと、彼のファンに叱られるかもしれませんがね。彼と一緒にいたから、私もいろいろ欠陥はあるけれど、息子のことをいちずに思う母親を、何とか演じ切れたかなと思っています」

(2017年8月31日)